
智代 Reアフター

灯籠語り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

智代 Reアフター

【Nコード】

N4904P

【作者名】

灯籠語り

【あらすじ】

奇跡が起こらなかつた世界の智也（渚ルート）が智代アフターの世界の智代と出会う物語です。

雪が降り積もったあの日、汐を連れて歩いたあの日。あの日に俺の人生は終わるはずだった。一つの軌跡が起こらなければ。

「汐、汐！」

俺が声をかけても汐は既に返事をしなかった。

降り積もる雪の中、踏み出す靴には雪が入り込み、靴下にしみこんでいく。とうにつまさきの感覚は無くなっていた。足を踏み出すという簡単な動作を行うのもほとんど緩慢な動きになっていく。それでも俺は足を踏み出していった。汐の手を握って。止まるわけにはいかない。だが、俺の意思に反して足は踏みぬいた雪の層から這い出すことは出来なかった。力を入れているはずが、まったく力が伝わっていない。

立ち止まった俺と汐の上にまだまだ降り続く雪は容赦なく積もっていく。

（ああ…、もうだめか）

俺はなんとなくそう思った。それが引き金だったのか、立つことさえ次第に困難になっていく俺の体は雪の床へと倒れた。

（冷たい）

俺の体を柔らかく受け止める癖に、非情なくらいに冷たい雪。

（渚……）

（汐……）

（ごめん……）

しんしんと降る雪は俺と汐の最後を見届ける唯一のものだった。

強く踏みしめる音が確かな意思を持ち、近づいてくる。

その音は俺のすぐ近くで止まった。

「……智也？」

俺のことを下の名で呼んでいる。

「智也なのか？」

そいつは、俺の肩をゆすり始める。

「おい、智也」

女性の声だ。俺を智也って呼ぶ奴は女では杏だけだったはずだ。

「智也、すっかりしろ！」

いや、本当にそうだったか？

「必ず助けてやるからな」

俺の体が軽々と持ち上げられ、女性の背中に乗せられる。

いたじゃないか、こんなばか強い力持ってくる癖に人一倍女の子らしさを気にする奴が。

「智……代」

（後書き）

智代アフターが好きなので書きました。

こちらは、別の作品、はじまりの歌の合間にちびちび更新していければ

と思っていますのでよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4904p/>

智代 Reアフター

2010年12月14日05時19分発行